

真似ることであつて気付く自分の可能性

「我輩も犬である名前は勿論ない何処で生れたか忘れてしまった主人は中学校の生徒である神経衰弱とかで何一つ満足にできない癖にいろんなものに手を出したがる男で毎朝、鉄アレイを振って一日おきに腕の寸法を測って見たり柔道を習って女中を腰車にかけてほうり出したり」この聞き覚えのある書き出し、でもよく読むと「猫」ではなく「犬」ですね。この作品は、憧れであった作家の作品を模して芥川龍之介が書いたものです。彼は、その思いが叶い、東京帝大在学中の作品「鼻」が目標とする夏目漱石に評価され文壇に登場しました。

さて、皆さんは、「学ぶ」の語源が「真似る」であることを知っていますか。古い時代の言葉では、「学（まね）ぶ」と読み、模倣する経験の積み重ねで能力が身に付くことを意味します。

近年では、人の動きを見て自分が行動したかのように反応する脳内神経細胞ミラーニューロンの存在も分かり、神経科学的なメカニズムの一つとして解明されているようです。

今から約30年も前、教育実習先の中学校でのことです。私が走り幅跳びを指導していると、思いがけないことから自分の能力に気が付いた生徒がいました。

納得のいく記録を出せずにはいた生徒が、半ば自暴自棄となって、ある有名なオリンピック選手を真似てジャンプしました。お世辞でもかっこよいとは言えませんでした。周囲の生徒は、空中を走るように跳ぶ姿を見て目を奪われました。しかし、私は、着地した場所を見て「えっ！」と声も出せないほどの驚きを心の中で叫びました。思わず計測係のメジャーを奪い取り、心臓の鼓動で手が震えるのを抑えるように着地点を凝視し、記録を測りました。私は、目を疑いました。その記録は、5mを超える大ジャンプでした。記録以上に、一番驚いていたのは生徒自身です。笑顔もなく何が起きたのか分からないといった表情となっていました。

当時は、アメリカのカールリス選手がオリンピック陸上競技で数々の偉業を成し遂げ、空前の陸上競技ブームでした。高速で走るロボット「カール君」と対戦するテレビ番組も大人気となり、走り方や跳び方を真似する子供たちがたくさんいました。私は、この経験で、技術を教えるよりも、お手本を見て真似させることで、秘めたる能力が発揮できることを知りました。

また、この真似ることから学ぶプロセスの中で重要となってくるのが情報収集です。例えば、急にライオンの絵を描いてくださいと言われた時、鬣、鋭い牙、目つき、しっぽなどのイメージはあるものの、全て断片的で正確には描けません。よく知っていると思った動物でさえも意外に記憶は曖昧です。やはり、きちんと描くには対象物の情報を徹底的に調べる必要があります。調べて描き、また調べては描き、これを繰り返すことで、より本物に近いライオンを描けるようになるはず。このように、真似る学び方は、目的がはっきりすることで必要な情報も明確となり、効率の良い反復も実現できます。

令和5年も師走を迎え、慌ただしい日々が続く中、私はあるクラスの授業を見学させてもらいました。「先生になったつもりで授業を行ってください。」この指示でグループ発表が始まると、「あ！ここ、間違いやすいです。」クラスが笑いの渦に巻き込まれていく中、生徒は目を丸くして驚いたような声で言います。「あれ？ここ、テストに出ますよね、先生！」

教室の後ろで腕を組み、じっと見守っていた先生にクラス全員の鋭い眼差しが集中します。思わず「あ、え、その・・・」と言葉を詰まらせている姿は、見様見真似でジャンプしたらびっくりするほど遠くへ飛んだ生徒に慌てた自分自身と重なりました。笑顔で包まれた教室には、一人一人の可能性が真似（学）ぶの匂いとなって先生の心に（冷）汗をかかせていました。

